

## △新刊紹介▽

藤原与一先生著

### 「国語教育の技術と精神」

### 「ことばの生活のために」

表現と理解への手引き

藤原与一先生のご高著「毎日の国語教育」は、昭和三〇年の出版以来、すでに国語教育にたずさわる者にとって必読の書として版を重ねている。統「毎日の国語教育」というおつもりでまとめられたのが「国語教育の技術と精神」である。この題について、先生は、次のように述べていられる。「この題目を心にいだいて、いく年をすごしてきたであろうか。私にとっては、この題目は、現在、こうとしか言えない、かけがえのない題目である」(七ページ)と。同時に「現下 国語教育に對する批判のいくらかを意味するものでもある」と、本書の題目にこめられた先生のお気持ちをも述べていられる。そして、現下 国語教育研究の分析主義に對して、国語教育はもとと総合的なものでなくてはならない、つねに愛情でつらぬかれていなくてはならない、「技術と精神とがむすびついたところに――二つのものが一体となったところに――ほんとう

の教育も国語教育もあるだろう」(八ページ)。「国語教育を、学問として重んじていきたい。学問として重んじていけば、国語教育の技術と精神とは、統合されるであろう」(一二ページ)と、国語教育研究としての総合的なたちば・見地を重んじ、学問としての国語教育・国語教育学をお考えになっておまとめになっていられる。

全体の叙述方式では、章・節の名称をさけたものにしていられる。どの一編からでも読んでいってからおうというお気持ちからで、次のような構成がなされている。

はじめに

国語教育の技術と精神

現実を見る――国語教育の開拓――

考えさせる 国語教育

論理的思考と国語教育

愛情の国語教育

国語教育での「問い」

「書く生活」の教育

読みの深化過程

「聞く力」の養成のむずかしさ

話すことばはなかなか見つかからない

――そういう「話すこと」の教育――

国語教育の機能

国語生活の基本能力

国語教師の国語教育研究

おわりに

「国語教育の技術と精神」が出版された一年半後に、「ことばの生活のために」が出された。一般社会人向けの講談社現代新書のかなの一冊としてで、表現と理解への手引き」という副題がつけられている。毎日のことばの生活にすぐに役立つことを目ざされたものである。新書判というポケットに入れて携帯できる、いわば「ことばの生活のための手帳」である。先生は、「方言の研究は、多くの人から話を聞かせてもらわなくてはならないので、相手に迷惑をかけたことが多いと思います。ですから、それに対する報恩のような気持ちでこの本を書いたのです。正しいことば生活によって、創造的で、しあわせな生活を送ってもらいたいと願っているからです。」(「中国新聞」昭和四二年二月二〇日)

と、お話しになっていられる。

やさしく語りかける調子の文体で、いかに先生から一対一でお話をうかがっている気持ちになつて、あるところでは、ふと静かにたちどまつて考え、あるところでは、どんな具体例をあげてのご説明に聞き入るといった読んでいて実に楽しく親しみやすい、たぐいまれな手引き書である。ことばを見つめ、たえず国語教育をお考えになつていらっしゃる西尾実先生のおすずめで出版されたということも、いかにもこの本の内容にふさわしく感ぜられる。

まえがき

- 1 「ことばの生活」をよくするために
- 2 表現生活のための基本の心がけ  
―話しても書いても―
- 3 話す生活をよくする方法
- 4 書く生活をよくする方法
- 5 理解生活のための基本の心がけ  
―読んでも聞いても―
- 6 読む生活をよくする方法
- 7 聞く生活をよくする方法
- 8 国語生活の進歩のために

このような構成をもつ、ユニークな「ことばの生活のために」では、「国語教育の技術と精神」における理論を、具体例をいっそう多

くし、ずっとくだいて述べていられるところがある。たとえば、「書く生活」に例をとつてもそのことがうかがわれる。

「『書く生活』の教育」は、  
書く生活

作文教育の振興  
書くことの意義

―書くとはどうすることか―  
「書くこと」の自然性を

「観念」教育  
短作文教育

―「書くこと」の小作業・小課題の教育―  
短作文教育―a、一語作文―

短作文教育―b、一文作文―

短作文教育―c、二文作文―

短作文教育―d、三文作文―

短作文教育―f、「一章」作文―

短作文教育―g、二百字限定作文―

短作文教育の愛情  
長作文の教育

長作文の中心点  
長作文教育での講想メモ  
長作文の重点指導

作文教育「『書く生活』の教育」のために  
という構成である。戦後実践的作文教育論の

白眉と言えよう。一方、「書く生活をよくす

る方法」は、次のような構成である。

(1) 書く生活のモットー  
(2) 短く書く―その一「一語作文」―

(3) 短く書く―その二「一文作文」―

(4) 短く書く―その三「二文作文」―

(5) 短作文 (6) 長作文 (7) 読書生活  
「短作文指導から長作文指導にわたつて、

『書く生活』の自然性を盛り立てる作文教育、発展的な作文教育を」、「言いかえれば、

人びとの『書く生活』をすすめばますます教育法を考究」(「国語教育の技術と精神」一三一ページ) しての理論・実践なのである。読

者対象を異にしての記述ではあるが、いずれも、書くことを、あくまでしぜんの行為として

身につけさせる目的に貫かれた構成で、先生の豊かな経験に基づく「書く生活」「産むよろこび」を、みんなに味わい・身につけてほしいというお気持ちに満ちた、いかにも

示唆深い教えにあふれている。わたしくどもことばの生活を営み、国語教育を日々考えて

いる者にとって、両者は、ほんとうにありがたい。読むほどに、実に多くの教えが得られ、国語教育の実践・研究の座右の書となつてくる。

「国語教育の技術と精神」(A5判、二〇

七ページ、昭和四〇年七月、新光閣書店刊、六五〇円)

「ことばの生活のために」(新書判、二一〇

ページ、昭和四二年一月一六日、講談社刊

二三〇円) (白石寿文)